

『社会科学のリサーチデザイン

— 定性的研究における科学的推論』

(G.キング・R.O.コヘイン・S.ヴァーバ著, 真淵勝監訳)

『社会科学の方法論争

— 多様な分析道具と共通の基準』

(H.E.ブレイディ・D.コリアー編, 泉川泰博・宮下明聡訳)

食料・環境領域 主任研究官 川崎賢太郎

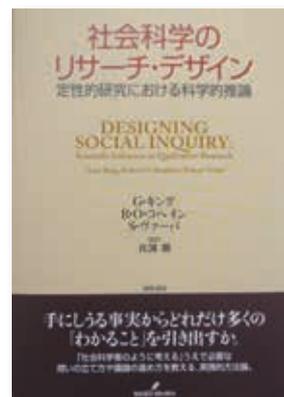
社会科学の研究は定量的研究と定性的研究とに大別できます。前者は多数のデータと統計手法を用いる点に、後者は少数の事例に着目し、現地調査や歴史的資料の分析を行う点に特徴があります。農業経済学の研究にもこれら二つのスタイルが混在していますが、両者の分析方法は大きく異なるため、意思疎通が困難な場合も少なくありません。今回紹介するのは、定量的研究者と定性的研究者が、それぞれの立場から研究の「方法論」を論じ合う大変エキサイティングな二冊です。

まず定量側の視点から書かれた『社会科学のリサーチデザイン』(以下DSI)は、定量的研究者と定性的研究者に対話の契機を与え、方法論の重要性を再認識させたものとして、高い評価を受けている図書です。同書の主張を端的に言えば、定量的研究の方法論を定性的研究者も採用すべき、というものです。同書はまず、科学的研究の目的は推論にある、とします。推論とは、直接的なデータを超えて、直接には観察されない、より広範囲の何かを推察する行為です。そして著者らは、科学の中身は主として方法とルールであって、研究の内容・主題ではないと言い切ります。つまり定量的研究と定性的研究は単にスタイルを異にするだけであって、研究の目的やとるべき方法論に本質的な違いはないというのです。こうした前提の下で同書は、定性的な研究で見過ごされがちな様々な方法論上の注意点を解説しています。

一方、これに対する定性的研究者からの反論書が『社会科学の方法論争』(以下RSI)です。同書は定量的研究の欠点や定性的研究の長所を指摘しながら、定量至上主義とも言うべきDSIの姿勢を批判します。例えば定量的研究で用いられる回帰分析にも様々な問題点があることや(条件付独立, 単位同質性, 欠落変数等), 妥当性の高い推論を行うためには事象に関する深い知識や理解が不可欠で、それを解明する点に定性的研究の役割があることなどは、もっともな主張でしょう。またDSIは推論の妥当性を高めるために事例数を増やすことを要求しますが、事例を増やせば同質性が損なわれ、説得力が低下する危険もあることをRSIは指摘します。こうしたことからRSIは、定量的研究と定性的研究に優劣はなく、多様な方法論が共存し、補い合うべきだとしています。

両者の違いの一例をご紹介します。農家の規模拡大の要因を知りたいものとする。この場合、定性的研究でよく見られるアプローチは、一戸ないし複数の大規模農家に聞き取り調査を行い、規模拡大を可能にした要因を探ることです。しかしDSIは、こうした事例の選び方では因果関係を過小評価してしまうこと(事例選択バイアス)、特に事例が単一の場合は、決して因果関係を知り得ないことを説明します。彼らの処方箋は、小規模農家も含め、偏りなく、幅広く事例を選ぶことです。これに対してRSIは、複数の事例の比較によって因果関係を考察する場合には事例選択バイアスが問題となるとしつつも、単一事例を入念に調査し、統計的手法を用いることなく、例えば裁判における論証のように因果関係の証拠を論理的に積み上げるアプローチをとれば(同一事例内・因果プロセス観察)、因果関係を適切に評価できると反論しています。

このように事例の選び方一つをとっても、両者の相違は鮮明です。しかし大切なことは、定量的研究と定性的研究の特徴を正しく理解し、よりよい方法論を追及する姿勢です。いずれも政治学者によって書かれた図書ですが、問題の構図は農業経済学を含むあらゆる社会科学にあてはまります。定量的、定性的、どちらの立場の研究者であっても、二つの異なる視点から「方法論」を眺めてみれば、きっと新たな発見があるはずで、これら二冊はその絶好の機会を与えてくれることでしょう。



写真(上)
『社会科学のリサーチデザイン—定性的研究における科学的推論』
著者/G.キング・R.O.コヘイン・S.ヴァーバ著,
真淵勝監訳
出版年/2004年
発行所/勁草書房

写真(下)
『社会科学の方法論争—多様な分析道具と共通の基準』
著者/H.E.ブレイディ・D.コリアー編, 泉川泰博・宮下明聡訳
出版年/2008年
発行所/勁草書房